

# 松明調進行事

たいまつ

## 伊賀一ノ井松明講

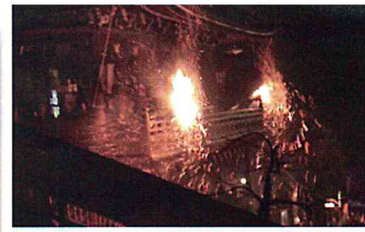


関西に春を告げると呼ばれている「お水取り」、正式には東大寺二月堂「修二会（しゅにえ）」といます。練行衆と呼ばれる僧侶が二月堂に籠り、観音様に懺悔（ざんげ）をし、世の中の平和と人々の幸福を願う、752年から途切れず続く業法で、元々は旧暦の2月に行われていました。近年は3月1日～14日までの「本業」とその前の10日間の「別火」の約1ヶ月の行事を呼びます。

「お松明」は14日までの2週間、毎夜行われていますが、12日の松明だけは一回り大きくて「大籠松明」と呼ばれ、13日未明に行う若狭井の「水取り」と共にあまりにも有名で、13日の新聞やニュースでは春の訪れを表す行事として大きく取り上げられています。

業法の中でも13日～15日の未明に行われる「達陀（だつたん）」は煩惱（ぼんのう）を焼き尽くす炎として、非常に重要な役割を持っています。この「達陀松明」の心木として使われるのが赤目町一ノ井の松明木なのです。毎年3月12日に講員が徒歩で運んでいました。そのときの奈良への道のりは、坂ノ下、笠間峠、上笠間、小原、小倉、針ヶ別所、柚ノ川、一台峠、南田原、茗荷、鉢伏峠、鹿野園、奈良（東大寺二月堂）へ約九里（35km余）の行程です。また、小原より白石、福住、高樋の行程をとった年もあったそうです。二月堂へ寄進されている松明の量は、宝治三年（1249）の聖玄寄進状には、千二百把（わ）とありますが、この1把は1枚にあたります。今は1把は6～8枚ですが、昔は8枚だったので、150把で1200枚となり、ほぼ現在の量と同じです。荷造りを終えた5荷（か）の松明を、5人の松明衆と2人の香水衆が二月堂に上堂し、奉納しています。

発行 名張市教育委員会  
企画 春を呼ぶ会  
協力 伊賀一ノ井松明講・極楽寺  
(社) 名張青年会議所  
印刷 (株) 伊和新聞社



大籠松明



3月12日  
松明送り



東大寺二月堂「お水取り」の松明は、名張の赤目町一ノ井で作られ、運ばれています。

# 松明調進

たいまつ

達陀松明



2月11日  
松明切り出し調製



官観塚



3月10日  
調進法要



●この松明調進行事は、昭和31年名張市無形民俗文化財に、平成14年三重県選択文化財に指定されました。